

マーク・トウェインの“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County” にみる笑いの一考察

島田由香

はじめに

マーク・トウェインが、初めて作家として成功した作品は、エンジェルズ・キャンプで聞いた話をもとに書いた“Jim Smiley and His Jumping Frog”（以下“Jumping Frog”と略記）と言える。この作品は、1865年11月18日号の *Saturday Press* という週刊新聞に掲載された。1867年には、*The Celebrated Jumping Frog of Calaveras and Other Sketches* として一冊の本になり出版された。西部のキャンプやサルーンで、最大の娯楽として荒々しい男達の間で語られていた短いユーモラスな話を、ベン・クーンという酒場のバーテンダーから聞いたトウェインは、その話を活字にして成功した。アメリカ中の人々を惹き付け、一冊の本にまでなったこの短いユーモラスな話を持つ魅力とは何だったのか。

本稿では、“Jumping Frog”を通してトウェインのユーモアの原点を論じていきたい。

西へ

1861年にトウェインの兄オライオンが、リンカーン政府によってネバダ準州のカーソン・シティの知事補佐に任命された。この時、25才であったトウェインは、兄の私設秘書として兄と共に駅馬車に乗り込み20日間かけてネバダに向かった。当時のネバダは、ロッキー山脈を越えた西の果てであったが、1859年にコムストック・ロードという銀鉱脈が見つかり、まさにシルバー・ブームでわき返っていた。ネバダのカーソン・シティは人口2千人で、銀を求めに鉱夫達が集まっていた。この時の様子を母親に手紙で以下のように伝えている。

The country is fabulously rich in gold, silver, copper, lead, coal, iron, quicksilver, marble, granite, chalk, plaster of Paris, thieves, murders, desperadoes, ladies, children, lawyers, Christians, Indians, Chinamen, Spaniards, gamblers, sharpers, coyotes (pronounced Ki-yo-ties), poets, preachers, and jackass rabbits.¹

トウェインは、カーソン・シティ到着後、最初の数ヶ月は、調査の仕事をしていたが、投機家達がハンボルト鉱山の新たな銀採掘に向かっていくのを見て、遂にトウェインも採鉱熱に取り憑

かれ一攫千金を夢見る採掘者の1人となった。しかし、銀発見に失敗し、ミシシッピー川以西最大の新聞社であった *Territorial Enterprise* の記者として週給25ドルで雇われる。彼は、西部の荒々しい男達の生活、カーソン・シティの議会のニュース、劇評などさまざまな取材活動を経験した。同時に、ここで彼は“journalistic hoaxing”²を習得する。ありえないことを実にリアルに書くという技術を習得した。

トゥエインは、1864年に、ネバダのさらに西、サンフランシスコに移った。1850年から1860年代にかけてのサンフランシスコは、ゴールド・ラッシュで沸き立ち富を求めた荒々しい男達が往来していた。1848年に人口7百人のサンフランシスコは、2年後には人口3万5千人に急増し、1860年には人口5万7千人の都市となった。サンフランシスコは、急速に文明化していき開拓者、農民、商人で賑わう都市になっていった。

トゥエインは、サンフランシスコについて“A truly fascinating city to live in,”と感想を持ち、モンゴメリー通りのホテルに滞在していた期間を“Heaven on the half-shell”とサンフランシスコの雰囲気を楽しんでいた³。サンフランシスコでの最初の仕事は、*Morning Call*の記者だった。しかし、*Morning Call*は、トゥエインが書く政治家や政治の汚職、不正を攻撃する記事を積極的に載せなかった⁴。次第に、*Morning Call*に記事を書くことにやる気がなくなってきたトゥエインは、自ら申し出て、週給を50ドルから25ドルに減らし、朝は10時に起きて夕方5時か6時には仕事を終えている。次にトゥエインは、*The Golden Era*に週1本の記事で月50ドルの契約をした。*The Californian*には、ブレッド・ハートが編集者になってからスタッフとして参加した。*Territorial Enterprise*にも寄稿していた。同年、12月に3ヶ月間、キャラベラス郡のジャッカス・ヒルにある、友人スティーブ・ギリスの兄ジム・ギリスの小屋に滞在した。トゥエインは、*The Autobiography*の中でジムについて以下のように述べている。

He had a bright and smart imagination and it was of the kind that turns out impromptu work and does it well, does it with easy facility and without previous preparation, just builds a story as it goes along, careless of whither it is proceeding, enjoying each fresh fancy as it flashes from the brain and caring not at all whether the story shall ever end brilliantly and satisfactorily or shen't end at all.⁵

後のトゥエインの作品 *Roughing It* のディック・ベイカーの猫や *A Tramp Abroad*, *Huckleberry Finn* の中にジムからの話を再現している。小屋滞在中、トゥエインは頻繁にメモを取っていた。ほとんどが“rain” “beans” “dishwater”といった単語だったが、1月のある1ページに記入されていたのは、エンジェルス・キャンプの酒場でベン・クーンから聞いたユーモラスな話だった。トゥエインのメモには、その時の様子が以下のように記されている。

Coleman with his jumping frog ~ bet a stranger \$50. ~ stranger had no frog and C. got him one: ~ In the meantime stranger filled C's frog full of shot and he couldn't jump. The stranger's frog won.⁶

トウェインは、長時間続くクーンの話し言葉のおもしろさ、語り口調のおかしさを発見し驚いた。

トウェインは、開拓者、肉体労働者、商人、売春婦といった自由奔放で野生的な人間達が混ざり合った西部で、記者として、小話、笑い話を直接、耳で聞き、その話し言葉、口調の型を発見した。同時に、天性のユーモア感覚に磨きをかけ“Jumping Frog”の土台を作っていた。

ユーモアの原点

トウェインの笑いの原点を知るためには、アーテマス・ウォードからの影響を軽視できない。イエール大学の Beers 教授は、トウェインについて、述べている。

Mark Twain's drolleries have frequently the same air of innocence and surprise as Artemus Ward's, and there is a like suddenness in his turns of expression.⁷

Water Blair は、*Native American Humor* の中でトウェインがウォードから受けた影響の大きさを以下のように述べている。Mark learned a great deal about the art of the humorous lecture from Ward (N.A.H.149). Mark learned from Ward not only the way to speak but also the way to write humorously (N.A.H.150). ウォードとの出会いから3年後の1866年には、トウェイン自身が講演家としてカリフォルニアとネバダでスタートを切った。ウォードは、ユーモリストと呼ばれ、まだテレビや映画といったメディアが発達していない時代にユーモリストとしてアメリカ各地を講演して話し家として人気があった。人々は、彼の話と話芸を楽しんだ。トウェインは、ウォードの話芸について“*How to Tell a Story*”の中で触れている。そのすごさは、笑いの勘所をさりげなく使い、聴衆が笑いの勘所に気付いて笑い始めても、ウォードのほうは不思議そうに何も気付かない振りをするのだと述べている。また、ユーモラスな話はアメリカ人のもので、ユーモラスな話はまさに芸の仕事であり芸術家だけが語れるものだと述べている。ウォードの話芸は、肝心のユーモラスなところを何気なく言うことであり、語る側がいかに注意深く語っているかということである。これこそ聴衆を笑いに引き込む技術である。

語る側がいかに注意深く語るかという技術は、“Jumping Frog”のホイーラーの語りに生かされている。“Jumping Frog”は、ほとんどがホイーラーの語りで成り立っている。“and” “but”が多く、“anyway” “why”は作品中7回、“well”は11回もでてきている。語り手 Wheeler の名⁸のように、文章は決して切れない。切れない語りを読み続けていくとリズムが生まれ、登場人物の姿が想像できるほど臨場感が味わえる。「私」からの話として、ホイーラーの語りを読んでいるはずの読み手は、本の中に入り込んでいつのまにかホイーラーの傍らに座り、聞き手となっている。語り中心の作品を、よりおもしろくするためにトウェインは、「入れ子」構造を用いている。この構造は、南西部のユーモアの方法であり新しいことではない。最初に作者が、登場してすぐに姿を消して語り手が登場するという枠組み構造のことである。W・ブレアによると、この方法は3つの不調和をもたらすという。1つは正しい文法と口語体との不調和であり、2つ目は、予想外の状況という不調和であり、3つ目は、リアリズムとファンタジーとの不調和である⁹。“Jumping Frog”では、この「入れ子」構造を用いながらトウェインは、聞い

て笑える話を活字にして再現する為にさまざまな工夫をしている。まず、作者（マーク・トウェイン）である「私」は、きちんとした標準語で語り始める。

In compliance with the request of a friend of mine, who wrote me from the East, I called on good-natured, garrulous old Simon Wheeler, and inquired after my friend's friend, W. Smiley, as requested to do, and I hereunto append the result. (N.A.H.515)

次に語るホイーラーは、終わりのない単調な調子で話しかけて語り始める。“Rev. Leonidas W. H'm, Reverend Le-well, there was a feller here once by the name of Jim Smiley...” (N.A.H.516) 読み手は、二人の対照的な語り方の違いに興味を持ち始め「私」の、本来消息を知りたいレオニダス牧師とはまったく違う人物ジム・スマイリーの話に引き込まれていく。ホイーラーは、ジムがいかに賭け好きかを、賭事の対象として競馬、闘犬、猫の喧嘩、小鳥を例に出して話していくが、突然、牧師の名もだして牧師も賭事の対象のひとつだと話す。しかし、また、すぐにカブトムシにも賭けることを例に出してくる。小動物と牧師が、ジムにとっては賭事の対象として同一だということが、読み手を笑いに誘う。さらに、牧師の奥さんの病状まで賭け、牧師の目の前でジムが、奥さんが治らない方に賭けたところで読み手は思わず大爆笑したくなる。喘息の馬まで登場し、さらに読み手の興味はかき立てられる。相手の後ろ足に噛み付いて死んでも放さず勝利する小さいブルドッグの話の後、ジムの飼っていた蛙の話になる。作品の後半からは、スマイリーの会話が、ホイーラーの語りと重なり、読み手は、目の前でジムと見知らぬ男との会話を見ているような錯覚に陥っていく。ジムが、見知らぬ男に騙されたことに気づき怒って追いかけて行きそれからの展開を読み手が期待しているところで、突然、ホイーラーは、誰かに呼ばれ席を立ってしまう。席に戻った彼は、別の動物である片目の牝牛の話を始める。読み手は、肩すかしを食らった状態で「私」の形式張った語りが入る。

But, by your leave, I did not think that a continuation of the history of the enterprising vagabond Jim Smiley would be likely to afford me much information concerning the Rev. Leonidas W. Smiley, and so I started away (N.A.H.521).

ホイーラーの語りに熱中していた読み手を、現実に戻してから話は締めくくられている。これは、漫才の典型的パターンと似ている。ボケ役と突っ込み役の漫才は、突っ込み役が、本題を語り始めると、ボケ役が一気にまくしたてる。ボケ役の語りは、脱線し始め、本題に戻ったかと思うとまた違う話に逸れていく。聞き手は、ボケ役の語りに引き込まれていく。ところが、いよいよボケ役の語りに收拾がつかなくなってくると、突っ込み役が、さっと話を閉めてボケ役を連れて幕間に消えていく。ボケ役の語りにさんざん笑った私達は、突っ込み役の語りで冷静に戻られる。「私」とホイーラーの語りの著しいコントラストは、漫才と同質であり、計算され尽くした工夫である。

トウェインは、読み手と聞き手の境を取り払った。書き言葉と話し言葉、標準語と地域の話し言葉の落差を際立たせることで、読み手は、話し言葉のリズムによって、臨場感を感じられ、身

近に生命力溢れる魅力的な西部を感じる事が出来る。

語りについては、トウェインは、間の取り方が大事だと主張している¹⁰。読み手が“Jumping Frog”を読みながらにして、聞いているかのような錯覚に陥るのは、作品に間があるからだ。例えば、“in the winter of '49—or may be it was the spring of '50—I don't recollect exactly (J.F 516)”や“And then he got the frog out and prized his mouth open and took a teaspoon and filled him full of quail shot—filled him pretty near up to his chin—and set him on the floor (J.F 520)”からも解るように、この作品が短編にも関わらず“—”が42回も使用されている。この“—”が、ホイーラーの語りの間を文字化したものである。この“—”の前後には、必ず“,”や“and”, “so”があって、決してホイーラーは、話を閉じようとしなない。このことによって、ホイーラーの語る話し言葉のおもしろさやホイーラーの人間味が強調されている。

この作品以前にも、セバ・スミスやオーガスト・ボールドウィン・ロングストリートが描いた地域の言葉を用いた作品はあった。しかし、スミスやロングストリートは、地方の言葉の語りを生かしているわけではない。彼らの本職は、判事であり、編集者であり作家ではない。その影響から作品内に教訓めいたことや戒めを書き残している。彼らは、ユーモアと説教を結びつけた。ウォードやベトロリアム・ナズビーは、ユーモリストを本業としていた。彼らの新しさは、言葉のおもしろさにあった。しかし、テーマは、教養と娯楽が混ざり合った話が多かった。トウェインは、彼らから影響を受けていたが、彼らと大きく異なっていた点は、人々を宗教めいた戒めや教訓めいたユーモアから解放したことである。同時に、人々をプロテスタントの持つ堅い枠にはまった考え方からも解放したことになる。

終わりに

トウェインは、“Jumping Frog”によって、開拓やゴールド・ラッシュ、シルバー・ブームに続く、新しい社会を形成しつつある西部の一般大衆の中で生まれたユーモラスな話を文学作品に高めた。読み手は、道徳的、政治的、社会的制約を感じることなく、純粋に西部の気分を味わい楽しむことが出来た。アンドリュー・ジャクソンやダニエル・ウェブスター等という名前を作品に用いていると、一見、政治的風刺と考えられやすいが、トウェイン自身には風刺という意識は薄かったと言える。語り手が閉じようとしなない話から伝わってくることは、ただ純粋に賭け事好き男のジムをおもしろいと思っている事実である。“Jumping Frog”を書いた時点でのトウェインのユーモアの本質は、あくまでも、自由奔放な語りのおもしろさを文学まで高め、生き生きとした話し言葉を表現する事を目的にしたものであろう。1865年10月19日、サンフランシスコから長兄オリオンに宛てた手紙には以下のことが記してある。

I never had but two powerful ambitions in my life. One was to be a pilot, & the other a preacher of the gospel. I accomplished the one and failed in the other... But I have had a 'call' to literature, of a low order-i.e., humorous. It is nothing to be proud of, but it is my strongest suit,& if I were to listen to that maxim of stern duty which says that to do right, you must multiply the one or the two or the three talents which the Almighty trusts to your keeping, I would long ago have ceased

to meddle with the things for which I was by nature unfitted & turned my attention to seriously scribbling to excite the laughter of God's creatures.¹¹

“Jumping Frog”に流れるユーモアを一番楽しんでいたのは、ユーモラスな話を書くことを神からの思し召しと気付いたトゥェイン自身だったのかもしれない。

注

1. Milton Meltzer, *Mark Twain Himself* (Columbia & London: University of Missouri Press, 1960), p49.
2. トゥェインとネバダで下宿が一緒だった記者、ダン・デ・クイルが、この“Journalistic Hoaxing”の技術を教えた。彼はトゥェインより6才年長で、優秀な記者だった。当時の西部に、一攫千金を夢見て集まった人々は、金銀を求め気持ちが高ぶっていてより強い刺激を求めている。新聞も彼らの要求に応える為、事実よりも刺激性の強い「人担ぎ」である大ばら話を提供していた。「人担ぎ」は、フロンティアの文化であった。成功したトゥェインの「人担ぎ」の一例は、1863年10月に *Territorial Enterprise* に載った記事である。狂気の夫が妻を殺し、夫自身も自分のどを耳から耳まで切り手に妻の首をぶら下げてカーソン州へやって来たという架空話で、いくつかの新聞はあまりの詳細さにこれを事実として転載したほどである。この「人担ぎ」を、単なる記事ではなく文学まで高めていったのは、トゥェインが初めてであると言えよう。
3. Milton Meltzer, *Mark Twain Himself* (Columbia & London: University of Missouri Press), p70.
4. 例えば1865年には、サンフランシスコでは、マイノリティーである中国人数人が白人によって殺される事件が起きている。トゥェインはこの事件について批判記事を書いたが、白人読者の反応を意識する *Morning Call* は掲載しなかった。トゥェインは、サンフランシスコ社会の腐敗、警察への批判の態度を貫き、*Morning Call* に乗せてもらえなかった記事を *Territorial Enterprise* へ送り掲載してもらった。亀井俊介『マーク・トゥェインの世界』p73.
5. Charles Neider, *The Autobiography of Mark Twain* (London: Chatto & Windus Ltd, 1959), p137.
6. Milton Meltzer, *Mark Twain Himself* (Columbia & London: University of Missouri Press, 1960), p73.
7. Walter Blair, *Native American Humor* (San Francisco: Chandler Publishing Company, 1937), 147-148. 以下、文中では本テキストを N.A.H と略記。
8. 英米文学において、名前が象徴していることがある。例えば、『シスター・キャリー』に登場する主人公キャリーと愛人ハーストウッドが、駆け落ち後に名乗った名前も Wheeler だった。彼らが Wheeler と名乗ってからは、一カ所の場所や職場に落ち着くことはなく、移動し続けていた。“Jumping Frog”における語り手 Wheeler の名は、決して、自分の話にピリオドを打とうとはせず延々と話したがっている様子を表している。
9. Walter Blair, *Native American Humor* (San Francisco: Chandler Publishing Company, 1937), p92.
10. Mark Twain, *How to Tell a Story and Others* (London: Kessinger Publishing, 1994), p6.
11. Justin Kaplan, *Mark Twain and His World* (New York: Simon and Schuster, 1974), p60.

参考文献

- Albert Bigelow Paine, *Mark twain's letters Vol.1* (New York: Gabriel Wells, 1917)
Charles Neider, *The Autobiography of Mark Twain* (London: Chatto & Windus, 1959)
Charles Neider, *The Complete Humorous Sketches and Tales of Mark Twain* (New York: Doubleday & Company, 1961)
Curtis D. MacDougall, *Hoaxes* (New York: Dover Publications, 1968)
James M. Cox, *Mark Twain* (Princeton: Princeton University Press, 1966)

Justin Kaplan, *Mark Twain and His world* (New York: Simon and Schuster, 1974)
Milton Meltzer, *Mark Twain Himself* (Columbia & London: University of Missouri Press, 1960)
Walter Blair, *Native American Humor* (San Francisco: Chandler Publishing Company, 1937)
亀井俊介『マーク・トウェインの世界』(東京：南雲堂, 1995)
長井善見『アメリカの方言』(東京：南雲堂, 1958)